



奥

出雲町に転勤したときあてがわれたのは、ずいぶんと年季の入った平屋の住宅だった。十坪ばかりの畑があったので古いほかは気に入って七年暮らした。ぼくはもつとそこで暮らしたかったのだが、町外に転勤することになったら、そこを出ないといけなくなつた。こんな古い住宅だれも入りたくないだろう、急いで追い出さなくてもよからうに、と町の担当者に愚痴つてみたが、規則を盾に取られてけんもほろろに突き放された。幸い、近くの住宅に入ることできて一安心したのだが、困つたのは蔵書の始末だった。本を買いそろえるのが楽しかったころなので、かなりの量があった。移転先は古くなくわりに狭かつたので、とても全部は収まりそうにない。

そのころから時々出入りしていたUさん宅でそんな話をしていたら、うちの離れをどうぞ使ってくださいと、まさかの申し出を受けた。一も二もなく飛びついたので、その離れというのがもともと茶室を想定していたとおぼしき三方を明け放てる珍しい造作になっており、風通しのよいことこの上ない。電気も水道も通っていないが、山と田んぼを望み、本を片手に横になるとついうつらうつらする。鴨長明は、こんなところで寝起きしていたのじやないかと思つた。

ぼくはそこがすっかり気に入って、せっかく蔵書を

置くのなら誰でも来て読める図書館にしてはどうかと思いつき、庵を「午睡亭さくら文庫」と名付けた。裏山から切り出した材木で書棚や座卓などをこしらえるのもおもしろかつた。町内の若者や、松江の大学生たちも度々手伝いに来てくれたりした。

ぼくにもつと才覚と知識があれば、いくらでもおもしろい空間にできたと思うのだが、十分に活用する道を開けぬまま松江に転勤となり、めつたに顔も出せなくなつてしまった。不義理を重ねている間に、Uさんも次々と家族を見送られた。月日はすべてに等しく流れ、ぼくやUさんに流れたのと同じだけさくら文庫も本も古くなっていった。本があるだけではただの書庫だ。代謝を促さなければ、場もまた年老いていくということをぼくは愚かにもわかつていなかった。

この春、何度かUさんのもとを訪ねた。築百年超の茅葺きの母屋もさくら文庫も遠からず空き家になる、とUさんは寂しそうに言つた。その地の水と養分とで育つた一本の巨木のような竹まいをただ朽ちるに任せるのはあまりに惜しい。とは言え一人で考えてもたかが知れているので、いっしょに考えてくれる人捜しかが始めようと思う。図書館である必要はない。茶店、お休み処、アトリエ、木質宿、ギヤラー、塾…。

古民家にご関心おありの方、ぜひご連絡ください。

空き家 2

木幡智恵美

消える家②

我が家が建っているのは、かつて競馬場があつたところで、「浜乃木の競馬場です」と言えば、私より年上の人なら場所が分かってくれる。丁度一キロのコース跡が道路になつていて、私が今の家に来た頃は、まだ所々に畑があつた。次第に道路の回りを家が埋め尽くすようになったのだが、今ではぼつぼつと空き地が出来ている。

以前すし屋だつたところが今は草原となつてしまつた。よく物にぶつかりたり穴に落ちたりした長男は、ここの看板にも頭をぶつめた。一度も入つたことのない店は女性の名の看板だつた。人の出入りが無くなつても、看板だけはかかつていたが、建物ごと壊され、数年前に更地になつた。その道を挟んだ向かい側も同じ頃に建物が壊され更地になり、二箇所とも、どこから飛んでくるのか、様々な雑草が生えては枯れを繰り返している。時には、マーガレットやキンギョソウなど、花瓶に挿したい花が咲き、摘ませてもらおうかなと思ふこともある。でも、よそ様の土地だしロープが張つてあるので、横目で見ながら通り過ぎる。

すぐ近くにある家も、一昨年更地になつた。老夫婦のうち、先に旦那さんが施設に入所され、毎日面会に通う奥さんの姿を見かけた。孫を連れて散歩をしていると、「おいで、ミカンあげるよ」と、庭に生っているミカンを腕いでくださったこともある。その奥さんも、同じ施設に入られ、家には人がなくなつた。それからしばらくして、娘さんらしい方が家に入りするようになったと思つたら、まずミカンの木を切られた。あんなにたくさん実をつけるミカンの木だつたのに、勿体ないことだと思つていたら、家を壊され始めた。娘たちが我が家に来た時は、孫たちとショベルカーで壊される様子を見に行つた。孫たちには、ミカンと、腕いでくれたおばさんの姿が浮かんでいただけだ。

更地になつた土地は奥行きがあり、思つていたよりずっと広かつた。道路側に、草除けの黒いシートが張られ、娘さんらしい人がたまに来て、草を抜いておられる。去年の春だつたか、緋色の松葉ボタンのような花が点々と咲いていた。これは綺麗だから抜かずに置かれたのかもしれない。でも、この広さだ。たまの草抜きでは追い付かないだろう。

30代フリーター こんなツイートを見かけた。

「人間関係を悩む人は『人に会うとは傷つくこと』だと考えてみてください。あまり傷つけない人から、とても傷つく人がいるだけです。だから人に会った後に疲れるのは普通です。それが『とても仲の良い人』であつてもです」(ぼやぼやくん)

年金生活者 「傷つくこと」を「痛みを感じることに置き換えて、「人に会うこと」「人間関係」について考えてみる。

フィジカルな「痛み」を思い浮かべればわかるように、「痛み」というのはその度合いの幅が広い。無数の度合いがグラデーションをなしている。それは「痛み」と呼ばれていない感覚とも地続きだ。肌を強くこすれば痛い、さすれば気持ちよくなる。気持ちよさも「痛み」の延長とみなせば、人間の感覚はさまざまな「痛み」で成り立っているとみなすことができる。

これらのフィジカルな「痛み」が身

度も経験しているはずだ。だれかに無礼なことを言われ、そのときは大したことはないと感じて、聞き流していたりすると、しばらく時間がたつて痛みや怒りが強まり、ああ言えばよかった、こうすればよかった、と思い始める。

30代 痛みを和らげる方法はあるのか。

年金 最も確実なのは、さらなる時間の経過を待つことだ。痛みの持続をひとつの緊張状態と考えれば、そこにフロイトのいう快感原則が働き、緊張を解除する無意識の心的なプロセスが開始される。それは自然治癒の一種とも言える。

ところが、受けたダメージがあまりに大きすぎると、快感原則のシステムそのものが故障する。いつまでたつても痛みがおさまらず、ダメージを受けた場面を繰り返し思い出したり、夢に見たりする。反復強迫、現在の言い方ではPTSDの症状が生じる。ただ、これも多くは長い時間を経て治まつて

体を含めた物質とのかかわりで生じるのに対し、メンタルな「痛み」は言葉とかかわることによって生じる。言葉というのは、何かを指し示すだけでなく、それを発する側と受け取る側の心の位置と向きを決めるからだ。吉本隆明は前者を指示表出、後者を自己表出と名づけた。この自己表出の強度や状態によって、心は「痛み」を覚えた、心「地よさ」を感じたりする。

30代 味噌も糞も一緒にするみたいな扱い方をしているのか。

年金 この場合そのほうがわかりやすい。「痛み」も「心地よさ」もおのれの身体の状態をリアルタイムで告げる役割をしており、その点で両者は同類だ。そうしたフィードバックなしに身体のコントロールはできない。人間は広い意味での「痛み」によって、そのつどの自らの身体像を形成し、それをもとに行動することができる。それと同様に、広い意味でのメンタルな「痛み」もまた、そのつどの心の状態を描く役割をしている。

いくと言われている。

だが、その場合でも、無意識の中にトラウマが残り、のちの別の経験がそれを刺激して症状を引き起こしたり、不可解な痛みを生じさせたりする可能性がある。私自身のことを言えば、おそらくたいいていの人があまり気にしないような他人の言動に、不釣り合いな強さの痛みを感じることもある。自分では気づいていないトラウマが、その

30代 痛みは後からやつてくるとよく言う。交通事故などでは特に。

年金 交通事故の場合のように、身体が並はずれた強い衝撃を受けると、交感神経がアドレナリンを大量に分泌させるので、痛みを感じる機能が一時的に麻痺すると言われている。格闘技やラグビーで選手どうしが衝突しても、あまり痛みを感じないで競技を続行できるのも、同様の理由と推定されている。

素人なりに考えると、いきなり激しい痛みを感じると、その原因である危険な状態から逃れたり、それを除去したり、傷んだ部位を保護したりする動作ができなくなるため、とりあえず痛みを和らげるように身体ができていくと思われる。そうした応急の動作がひと通り終わったあと、身体の損傷の程度に応じた強さの痛みが生じ、危険の度合いを告げる仕組みになっていると考えられる。

メンタルな痛みを感じるときも同様のプロセスをたどることを私たちは何

とき刺激されているに違いない。

30代 痛みなしには生きていけないとは、なかなかやつかいだ。

年金 ドゥルーズは、人間は「強制されてやむを得ずといったかたちでのみ思考する」と言っている(『差異と反復上』財津理訳、385ページ)。何に強制されるのかは書いていないが、真つ先に思い当たるのは痛みだ。フィジカルなものにせよ、メンタルなものにせよ、痛みは「なぜだ?」という問いを私たちに強いる。それが思考の始まりとなる。

思考の重なりはやがて思想を生む。

思想を自分の望む世界とのかかわり方の像と考えれば、それは社会にも当てはまる。社会がおのれの望む世界とのかかわり方の像を描くとき、それが国家の理念を形成する。社会の抱える痛みや屈託が思考を起動し、その積み重なりが思想となって、国家の理念を形づくっていると言うことができる。理念は理想でもあり、それは現実が不完全であることを絶えず告げている。

ニュース日記 872
中村 礼治

痛くなければ生きられない